



## 長崎港

写真に見る

1115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□ 20 □

蒸気タービン船は、明治41（1908）年就航の青函連絡船の比羅夫丸とされている。石油を燃料とするデイズル船の登場は明治40年代以降であった。

蒸気船の帆柱に結ばれたロープには、洗濯物と思われる布が干されている。停泊中に休息する船員の仕事があがられる。

燃料となる石炭は団平船と呼ばれた幅広の小舟が供給した。「団平」は座布団のことである。蒸気船の船腹に横付けし、女性を中心とする沖仲仕によりはしこを使ってバケツリレーの要領で積み込まれた。長崎港

名物艦船積み込み風景の「天狗どり」である。水の供給は澤山商店（澤山汽船の前身）が請け負った。創業者の熊右衛門は明治18（1885）年に船舶給水とはしけ運送を手掛け、息子の精八郎は五島や離島の物流を手掛けて事業を拡張し、澤山商会の基礎を築いた。土井首村に浄水場を持ち、明治27、28年の日清戦争で入港する船舶に燃料炭と水を提供し、37、38年の日露戦争でも佐世保鎮守府および長崎港を補給基地とした日本海軍連合艦隊にこれらを供給した。

給水船には白地に赤の菱

形に澤山の「S」を配した旗印を用いたという。写真右のはしけは真ん中に手押しポンプが見えるので給水船と思われるが、澤山商会の手配であろうか。

（長崎外国語大学長）

この企画の過去の記事、写真は長崎外国語大のホームページ（<http://www.nagasaki-sai.go.ac.jp/rechnas/newspaper/>）で見ることが出来ます。



長崎外国語大のホームページにアクセスできるQRコード

随時掲載します

# 南蛮船以来の停泊ルール